

イネ品種開発のための基礎遺伝学的手法、圃場での栽培試験や生育調査の仕方などまで広くカバーした研修が行われました。農民自身による水田造成のやり方の研修やアフリカ特に西アフリカで重要な主食であるヤムイモやキャッサバの健全種苗の大量増殖技術の技術移転なども、それぞれガーナ土壤研究所（SRI）、国際熱帯農業研究所（IITA）と国際熱帯農業センター（CIAT）で実施されました。他にも、国際とうもろこし・小麦改良センター（CIMMYT）、国際植物遺伝資源研究所（IPGRI）、ギニア国立農業研究所（IRAG）およびアフリカ人造り拠点（AICAD）が参加しました。日本人の研究姿勢がアフリカに根付くことが期待されます。（浅沼修一）

カンボジアにおける 農産物加工振興のための調査 文部科学省平成18年度 拠点システム構築事業に採用

2006年12月「カンボジアの地域レベルにおける農産物加工振興とその人材育成のための調査」が文部科学省平成18年度拠点システム構築事業「国際教育協力イニシアティブ」に採用されました。

本調査の目的は、途上国の大学が果たす社会貢献を我が国の大学が支援する効果的な方法を明らかにすることにあり、カンボジアの貧困削減を目指して農産物加工業を振興するために、加工業の実態とその市場性を現地調査すると共に、王立農業大学（RUA）における同分野の講義・実験・実習の実態を調査して、カリキュラムの改善と必要な教材を検討し、具体的な方策を提示することです。



カンボジア、タケオ州 酒造・養豚農家 酒蒸留装置に火を入れるところ

松本団長以下、杉本（ICCAE）、本村（名古屋大学研究協力・国際部国際課長）の3名が、平成19年3月14日カンボジアに向け出発し15日から20日までRUAの協力を得て、現地調査を行いました。なお、この調査は名古屋大学大学院国際開発研究科の西村グループ（総長裁量経費）と合同で行われました。

調査結果は、地域により農産物加工業には大きな特徴があり、川縁地域では魚加工と漬物製造、畑地域では菓子製造、水田地域では酒造りと養豚、丘陵地域では炭焼きと酒造・養豚が行われていることが明らかになりました。

そこでこれら4地域において82名にアンケート調査を行いました。調査により、加工技術は比較的シンプルで、設備投資も少ないが、加工は農家収入の向上に大きく貢献することが判明しました。コメ、畑作物、家畜、魚などを売るだけでは、農家の収入は十分でなく、生活向上には、農産物加工などにより付加価値をつけることの重要さが今回の調査で明らかになりました。また問題点として、加工農家にとっては低販売価格、低技術、低品質、資金不足が、参入したい非加工農家にとっては技術、労力、資金の壁があることも分かりました。（松本哲男）

新ソフトSAKAI導入に関する eラーニング会議開催される

農学国際教育協力研究センターと名古屋大学生命農学研究科は、2004年以来アジア諸国、特にタイ、台湾、フィリピンの農科系大学と共通修士課程の開発をeラーニング・システムを使って行っています。これまでコース・マネジメント・システムとして使用していたWebCT VISTAが2006年に他社に買収され、事実上ライセンスが使用できなくなったので、その代替えとしてオープン・ソフトウェアで無料のSAKAIを採用することとし、導入に関する会議を2007年2月8～9日に開催しました。会議にはチェンマイ大学、カセサート大学、国立中興大学、レイテ大学、アジア農科系大学連合（AAACU）から11名を招聘しました。

会議では梶田将司名古屋大学情報連携基盤センター助教授がSAKAIの詳細な機能について講演され、さらに実習により出席者全員がSAKAIの機能を習得しました。会議では今後SAKAIを各大学のeラーニングのソフトとして採用し、WebCTを使った講義内容をSAKAIに変換すること、他の教員への普